

## 藝術学関連学会連合シンポジウム『芸術と記憶』

香川 檀（武蔵大学）

発表タイトル：漂流の前と後——不在者の<sup>よすが</sup>縁としての写真とモノ

要旨：

現代は、過去の出来事や、今はもう居ない不在の人間についての記憶を、複製イメージや事物に託して表象する傾向がつよまっている。私たちの脳裏にではなく、いわば外在化された——それゆえ意味の余剰と欠乏、指示対象との密着と遊離とを抱えた——あやふやな媒介物によって、記憶が表現されるのである。写真や遺品は、故人を知っていた人がいなくなり〈再認〉されなくなると、指示性が薄れ、起源を喪失して漂流する空虚な記号や物に転落してしまう。本報告では、ドイツで制作された現代アートを中心に、人間の肖像写真と<sup>もの</sup>遺品に託された記憶の表象に焦点をあて、これら不在のものの<sup>よすが</sup>縁がどのように扱われるかを、漂流の以前と以後とに分けて検討する。ベルリン在住のアーティスト塩田千春は、親しい人や自分の思い出にまつわる靴を一般から提供してもらい、エピソードを書いた紙を添えて赤い糸でつないで展示する。これは、漂流以前の記憶を共有する作品である。あるいは、フランスの美術家クリスチャン・ボルタンスキーがベルリンに制作した屋外作品《欠けた家》と《ミュージアム》は、ユダヤ人迫害と戦争の記憶にまつわるもので、強制移送や空襲の犠牲者をつきとめて住居跡に名札を掲げ、彼らの記憶の品々や個人同定の資料をガラスケースで展示した。漂流に抗い、かつ「根無し草化」する運命じたいを表わしている。またボルタンスキーは、匿名の人の服や靴、あるいは顔写真を大量に集めて、もはや〈再認〉されえない漂流以後の品々によって大量死と〈死のありきたりさ〉を表象する。1200点以上の写真を集めたアーカイヴ《メンシュリッヒ（人間的）》はその一例だが、2013年3月から開催中の個展では、その一部を白い布にプリントし、天井から吊り下げて動かすインスタレーション《靈魂（たち）》を展示しており、動かすことによ

って死者の霊を呼び寄せるとしている。その可否はともあれ、漂流以後の顔写真や遺品はもはや個人の記憶を再認させることはない。彼の作品には、起源を失って漂流した衣服を大量に集めた作品群がある。1980年代から発表していく《保存（レゼルヴ）》シリーズのひとつは、会場の壁いっぱいには数百枚の子供の衣服を吊るし、アーム電燈で照らしたものである。禍々しい大量死のイメージを喚起する造形的レトリックを、アーサー・ダントーは「自己メタファー」と呼んでいる。これに対し、ドイツの美術家ジークリット・ジグルドソンが古物マーケットに出回る品々を集めて制作したアーカイヴ《静寂の前に》は、スクラップブックやガラスケースのなかに、写真や手紙、地図や新聞の切り抜きなど雑多なものの断片が並置され、断片的ナラティブを読ませる造りになっている。漂流物を収集したアートは、造形的な操作によって、現在の想起のありようを浮かびあがらせ、文化的に潜在する記憶の構造をあきらかにするのである。

以上